

第6章

病の苦からいのちもうけ

息も絶えだえに駆け込んで来た人（喘息）

一一九番しないで漢方専門の私のクリニックに駆け込んで、ほんとうによかつたとあとで述懐した近所の人がいた。中年の女性だつた。小肥りで色白、頬だけがいやに赤かつた。喘息の重積発作だつた。喘ぎ喘ぎ、息も絶えだえであつた。

こんな急場のとき漢方をあてにする人はまずない。一一九番するか、近くの医者といつたら内科とか、呼吸器科ということになる。もちろん、急場でない喘息の患者さんが漢方治療を求めて来ることはいくらでもあるが。

漢方にも発作時に用いて効果のある薬方はあるが、このときの女性患者の激しい呼吸困難に対しては逡巡せざるを得ない。もし効かなかつたらどうする。窒息死させてしまう。しかし、私の手のうちには、こんなときの漢方の一爻不足を補つて余りある生命素という隠し玉がある。この奥の手がなかつたら、直ちに救急車を手配して専門医のいる病院へ送

り込まねばならないところだつた。

しかし、救急外来でうまくゆくかどうか分からぬ。年間約六千人の人たちが喘息で亡くなつてゐる。それも重症の患者さんだけでなく、中等症、軽症の患者さんも亡くなつてゐることが気にかかる。こうした患者さんの約六〇パーセントは、病院到着時にはすでに心臓も呼吸も停止した状態であつたことが指摘されている。

以前にこんなことがあつた。知り合いの豆腐店にしばらくぶりで立ち寄つたところ、店頭にいつも見かけた親父さんの姿がなく、代わりに奥さんが白衣姿にゴム長靴という出で立ちで立ち働いていた。私はふと、嫌な予感がした。親父さんが喘息で苦しんでいたのを思い出したからである。まさかとも思つたが、

「ご主人は？」

と顔見知りの奥さんに声をかけると、

「亡くなりました。来週一周忌の法要をするところです」

と、やはり……と思わせる答えが返つてきた。

「そうでしたか。どうしたのですか？」

察しはついたが、こう尋ねるのが常識と思つたので……。

「実は……、喘息がありましたでしよう。発作がどうしても止まらなかつたものですから、救急車で〇〇病院へ行つたのですが、注射の針を抜くか抜かないかのうちに前こごみに倒れて、それつきりでした」

「そうでしたか。普段PCA（吸入器）使つていたんでしよう？」

「ええ、それも効かなくなりまして、どうしようもなくなつていきました。吸入器は主人の部屋にまだそのままになつています。怖いですよ……」

奥さんは肩をすくめて言う。怖いというのは喘息そのものよりも、薬のことと言つたのであることは言わざと知れた。この店は昔ながらの製法の豆腐を売りものにしていただけに、薬の怖さを言う奥さんの言葉には日頃からの想いがこもつっていた。医療事故として訴えようかとも思つたが、そうしたからといつて主人が帰つてくるわけではないと、思い止まつたと涙ながらに言う。

こうした事例は決して医療のミスではない。確かに薬は怖い面があるが、つまりはこの病氣に根本的治療の決め手がないのである。化学薬品の抱えている宿命なのである。患者さんの抱えている宿命というべきか。

喘息の発作の起こり方は、突発的に起るものと、小中発作から大きな発作に移行するものと、継続性の発作がしばらく続いたあとに大きな発作がくるものとある。

この親父さんの場合は小中発作が常にあり、その都度気管支拡張剤の吸入でしのいでいたが、このときはどうにもならなくて救急車を呼んだとのことだつた。

この親父さんにも、安全で根本的な治し方があるからいらっしゃいと声をかけたことがあつたのだが、当時は吸入器ですぐ治まつていたから、つい安易な方法に頼つてしまつたのだろう。現代医学の権威のほうに眼が向いてしまうのも人情である。ご縁がなかつたのは如何ともなしがたい。

本題のご縁があつたほうに話を戻そう。

「大丈夫ですよ、すぐ治まりますからね」

この一言がいえるのも、生命素あつてのことである。病名にかかわらず、ただ陰病でさえあれば大効があるという太陽の大きいなる陽の付与は、喘息の場合も当てはまる。生命素の補陽の働きは、いわば量子の世界であるから秒速二十万キロ、一秒間に地球を七周半という想像を絶するスピードである。

息も絶えだえに喘ぐ患者さんの口中に、私は生命素を落とし入れてやつた。光の速さそのままとは言わないが、それが喉を通ったと思われた途端に苦悶の表情がすうーっと消えた。何とも言えぬ安堵の表情が浮かぶ。私は黙つたまま患者さんが口を開くのを待つ。こんなとき、こちらから「どうですか?」などと聞くのは愚かなこと。患者さんが何と言うか、その第一声が真実を語る。

「ああー、助かりました……」

「…………」

私は微笑むだけ。

「これまで吸入でどうにか治まつてたのですが、今度という今度は全然ダメでした。それで救急車と思ったのですがそれも待つていられない気持ちで……。こちらへ来てよかつたです。吸入とは治まり方が全然違います。体がえらく温かです。ほらつ……、手が汗ばんでいます。病気がすうーっと抜けたみたい……」

生きるか死ぬかの思いを脱け出たとき、人はありのままの想いを吐露してくれる。このあと、私は生命素と漢方の駆瘀血剤（瘀血を駆逐する剤）の相補的医療を二ヵ月行つて、この女性は子供の頃からの喘息から解放された。経過中に大量の瘀血の排出があり、頬の

嫌に赤かったのが取れ、相貌がよくなつた。この場合、駆瘀血剤を用いなくとも生命素で瘀血は除かれるが、あえて用いて効果を倍加した。

この事例はかなり前のことなので、本稿を起こすに当たつてその後の様子を電話で問い合わせてみた。

「お蔭さまであれから生まれ変わつたように丈夫になりました。風邪ひとつ引きません。有り難うございました」

と、うれしいご挨拶であつた。この人があのとき救急車に乗つていたら……。前記の豆腐店の親父さんのようなことにはならないにしても、喘息というハンデを負つた暮らしから今もつて脱け出られずにいたであろう。

たまたまテレビで喘息を特集しているのを見た。電話で寄せられる質問に専門医が答えるという構成であつた。

「ほんとうにそれで治るのでしょうか？ ほかによい方法はないのでしょうか？ あつたら教えてください」

と質問した方があつた。喘息患者さんのおかれている立場がよく分かる。

これに対する専門医は、治るでしようかという質問には「寛解」という言葉で答えていた。腫れものに触るように喘息を薬でコントロールしておくということである。それ以上のこととは言えない専門医の苦衷は分かる。そして、ほかによい治療法はないのかという質問には答えずじまいであった。

私はこうしたテレビ画面上のやり取りを見ていて、これでは患者さんやご家族にとって何ともやり切れないのではと思った。

根本的治療に決め手がない難症の患者会がたくさんある。そうした会合で喘息友の会の会長さんと同席した。この人は奥さんがこの病気で苦しんでいることから、同じ病気で知り合った同病の人たちと会をつくり、こうした会の全国組織にも加わっているという。そこで私は、この病気の基にある虚労という体質的弱点について話し、喘息は単なる気道の炎症という部分の病気ではないのだから、虚労という全体を治さないとダメ、ということを言った。

ところが会長さんはてんてこ舞い耳を持たない。どうやら、ありきたりの対症治療に洗脳されているようだ。そこで、この会は喘息を治す情報交換のためにあるのではないのか?

と質したなら、口をつぐんでしまった。どうやらみんな治つてしまふと会そのものが瓦解してしまうから、寛解という程度でお茶をにごしておくほうがいいと思っているらしい。このぶんでは会長さんの奥さんをはじめ会員の「ぜいぜい、ヒュウヒュウ」の声と共に、喘息友の会はいつまでも安泰のようだ。

喘息の患者数は増えている。それもさることながら、中等症、軽症の患者さんが亡くなってしまうことと、発作で病院到着時にはすでに死亡しているのが半数以上にのぼるというのは問題だ。前記の豆腐店の奥さんが肩をすくめて言つた「怖いですよ……」という言葉がすべてを物語る。発作時に用いられる薬にあってもその場限りのこと、気管支拡張剤の吸入の効果は数時間で消えてしまう。どうしたって使い過ぎになつてしまふ。

こうした喘息治療のあれを思い、これを思うとき、気道の炎症という部分にとらわれずに、その基にある虚労という全体に目を向けて、全人的に治すことに依つてはじめて、いのちもうけとなるのである。

旧知の患者さんからのSOS

(狭心症、心筋梗塞、大動脈弁狭窄症、心肥大、心不全)

旧知の患者さんからの電話であつた。

「私、以前お世話になつた鹿野です。アレ治つてしまつたものですからそれつきりになつて います。実はいま狭心症で悩んでいます。それでお電話したのですが……」

この人のカルテを探してみると、三年ほど前に小水が漏れて困るということで受診した
方だつた。アレとはそのことだろう。泌尿器系統の虚労として漢方の補剤を処方した記録
があつた。生年月日からいまは七十三歳と知れた。

「胸がしめつけられるようになります」

ニトログリセリンで治めて いるとい う。

「治るでしょ うか？」

せつぱつまつた声であつた。何不自由なく暮らしているがこれだけが気がかりという。

狭心症は、心臓 자체を養つている血管が硬くなり、内腔がせばまつて血液の流れが妨げられるために起こる。冠状動脈の幹に発生したものや、三枝病変といつて三本の枝の動脈がせばまつているものはたいへん危険だ。

ところで、こうした心臓の動脈硬化から血流が悪くなつたための狭心症や、血管がまつたくつまつたことによる心筋梗塞に、いまの医療はどう対処しているのだろうか。

薬物療法としては、心筋の刺激反応を抑える薬、発作を防ぐ薬、血管を拡げる薬、鼓動を強める薬、反対に鼓動が加速するのを抑える薬、うつ血性機能不全による過剰な体液と塩分の排出を促す薬、血液の凝固を遅らせる薬、血中コレステロール値を下げる薬、不安を静める薬など数多あるが、これらの薬はすべて望ましくない、あるいは明らかに危険な副作用を伴う。したがつてそれに対処するための別の薬も必要となる。こうして薬は際限もなく増える。これではとても身が持たない。

こうした心臓病の薬物治療は、要するに患者を干からびさせて普通に生きていけなくなるほど衰弱させるか、または逆に体液の増加を放置して患者を重いうつ血性機能不全に追

いやるかのあいだで、綱渡りのバランスを取っている、患者さんにとっても医師にとっても、何ともやりきれない方法なのである。

こうした薬物治療のほかに、心臓病の治療や管理にエレクトロニクスの技術が用いられている。ペースメーカーは心臓に安定した鼓動を起こし、心臓の不整なりズムに自動的に反応して調整機能を発揮してくれる。また手術療法としては、冠状動脈を迂回して血液を送る別のルートを造ることや、風船を使ってせばまた血管を拡げることをする。

いずれにしても、薬はどこまでも一時しのぎであり、手術にしてもそのあとも動脈硬化は進行し、依然として生命を蝕んでいくことには変わりない。拡張された動脈はしばしばせばまるし、移植された血管にはアテロームの瘤こぶができる。

以上のような治療によつていくらかは病の進行を遅らせるることはできても、虚血の徵候はまた心筋の古巣に戻つてくるのである。

さて、話を鹿野さんのことに戻すと、電話での訴えに受診をうながしたのであるが、それまでにこの老婦人に致命的なことが起きなければよいがと、心にかかりながら受話器を置いた。

三日後、家人に付き添われて鹿野さんは、三年前とは打つて変わった憔悴した姿を見せた。仙台からと聞いていたので気の毒に思つた。

「たいへんでしたね」

「グリーン車でしたが、発作が心配で……」

鹿野さんを横にしてしばらく落ち着かせてから、腹を按するに脱力して力がない。臍下は綿を押すようである。栄養衰え、皮膚は枯燥してカサカサした感じ。脈は頻数で結滞（速くてとぎれる）している。こうした不整脈は心臓房室間にロック（伝導障害）があるときに起こりやすい。

「口が渴くでしよう？」

「渴きます。しょっちゅうお茶をのみます」

「息が熱いでしよう？」

と言ひながら私は鹿野さんの口許に手の平を近づけて、

「息を吐いて……」

と促す。思つた通り息が熱い。

「体が熱いでしよう?」

「熱いです。みんなが寒がつているときでも私は暑がりで暖房はつけません」

「夜寝ても布団から足を出しているでしよう?」

「そうです。そうです。足がほてつて気持ち悪くて……」

「汗つかきでしよう。汗が吹き出るように出ることがあるでしよう?」

「その通りです」

「便が硬いでしよう。コロコロ便では?」

「なんで先生……、そんなことが分かるんですか」

「それは分かりますよ。それからみぞおちが痞^{つか}えているような感じがありませんか? 不眠もあるでしよう」

「先生、なんで……、大当たりですがな……」

こうした問診は、漢方の心肺の虚労に用いる灸甘草湯^{しゃかんぞうとう}という薬方を頭に置いてなされたものである。鹿野さんが診察室に入つて来られたその途端に、頭にピンときたのがこの方剤なのである。患者さんの姿をちらつと見掛けたときその人から受け的印象が大切である。望診という。「望んで知るこれを神^{しん}といふ」と。

「神」^{じん}とは心身一如なるところの肉体のこと、つまりその人の全身全靈である。

こうした望診の所見は、あとの脈診や腹診によつて見直されることもあるが、鹿野さんはこれらによつても虚勞であることが裏打ちされた。ということは、炙甘草湯でまずまずよろしかろうということである。

ならばその上に何が必要なのか？ となると、またまた一爻不足という易の用語を持ち出さなくてはならない。この語は「それはそれでよいのであるが、いまひとつ足りない」という意味であることは前述した。

鹿野さんの場合、漢方の炙甘草湯でよいのだが、いまひとつ足りないということになる。何が足りないかは再三述べてきたところであるが、陰陽という生命消長の理法の消長に転ずる陽（氣）が足りないということである。私は右の炙甘草湯に生命素を併用する相補的医療で、この老婦人の心肺の虚勞（狭心症）からの回生に万全を期した。

「先生治るでしようか？」

「大丈夫ですよ、お帰りは楽ですよ」

と、鹿野さんの不安を一刀両断してお引き取り願つた。

さて、半月ほどしてこの方からうれしくてたまらないという声の電話が入った。予期していたこととはいえ、あまりにもその喜びようが大きかつたので、私はこのときの会話がいまも心に残る。

「ほんとうによく効きました。それつきり発作も起きません。動悸もしなくなりました。

先生がおっしゃつた通りお小水が増えました」

「それはよかつたです。お小水が増えたのはとてもいい治癒反応です。気分が爽やかになつたでしよう?」

「こんな爽やかな気分ははじめてです。それから、体がいつぺんに軽くなりました。うれしくて、うれしくて……」

「熱感も取れたでしよう」

「ねつかんつて……?」

「体がかあーっと熱くなることですよ。取れてきたでしよう」

「はあ、そうです。かあーっと熱くなるの無くなりました。汗が吹き出ることも無くなりました」

「眼がはつきりしたでしよう?」

「はあ、そう言われてみると、眼がしょぼしょぼしてしようがなかつたのですが、ぱあつとしてます」

「声がよく出るようになりましたね」

「そういえば、毎朝お経を上げているのですが声が楽です」

「声がこの前とまるで違いますよ」

「そうでしょうか」

「カラオケでもやつたらよく分かりますよ」

「私カラオケやりませんの」

「それじゃあ唱歌でも……」

「先生、年寄りをからかって……。ほんとに、こんなにすぐよくなるなんて信じられません。先生がいらっしゃって言つてくれた訳が分かりました。伺つてほんとうによかつたです」

「生命素を続けると素晴らしいことが起こりますよ」

「へえー、それはどんなことですか？」

「相貌が変わつてきます。もちろんよくなるということです」

「ソーボウつて？」

「顔かたちです。人相です」

「ああ……分かりました。その相貌ですか」

「江戸時代に水野南北という有名な易学者えきがくしゃがいましてね。この人が『修身録』という本を残しているのですが、南北はこの本の中で、食を正すと相貌がよくなることを言っているのです。たとえ死相が出ていても消えてしまうというのです。そして運勢も末広がりになるというのです。

さすがに宮中の易を立てていた人だけあって、食と生命と運勢との繋がりを見極めていたのです。食にはそれほどの力があるのです。食によつて体に取り入れているのは太陽エネルギーです。したがつて、食の力とは太陽エネルギーの力です。生命素をのむとこの繋がり通りのことが実現するのです」

「私、何不自由なく暮らしていますが、この病気だけが気がかりでした。それがこんなにも早くよくなつて……」

「何ご不自由なくお暮らしでも、誰もが望んでいるのは健康で長生きしたいということでしょう。これを妨げるのが動脈硬化です。狭心症の原因もこのことです。アテロームと呼

ばれる主としてコレステロールですが、脂肪分の堆積物が血管の内側にこびりついて血液の流れを悪くしているわけです

「そのようなたいへんな病気が、どうしてこうも早くよくなるのか、わが身を省みて不思議でならないのです」

「それはひと口に言つて、陽（気・エネルギー）の働きです。こちらへお出でになつたとき、陽性食のお話ししたでしよう。太陽エネルギーの……。こうした陽性食の取り入れは、あなたのような陰病のお体に、起死回生の働きを發揮することをお話ししましたね」「ええ憶えてります」

「陰から陽への転換。あなたにとつてこれ以上の癒しはありません。細く長く続けるといいですよ。病気が治るだけでなく、よい体調が維持されます。若返りも起こります」

こうして日なはずしての検査で、狭心症の徴候はまつたくなくなつたという。主治医が非常に驚いて、一体何をしたのかと聞かれたとのことであつた。鹿野さんはご高齢でもあるから、水野南北の言う末広がりの運勢までは期待することはなくとも、この方が初診のときにいみじくも言つていた、「何不自由ない恵まれた生活を送つてゐるが、この病気が

「気がかりで……」というその気がかりがなくなつたのだから、これはもう、いのちもうけと言つてよい。

これには後日談がある。この人の紹介で七十五歳の女性が見えた。八年ほど前に大動脈弁狭窄症と言われ、大動脈弁置換術を受けていた。二年ほど前より体調を崩し、これまで七回の入退院を繰り返している。心臓はこれ以上大きくならないと言われるほど肥大しているという。

「近くまた入院することになつています。鹿野さんからこちらのことを聞き、居ても立つてもいられない気持ちでまいりました。私のような者でも治るでしょうか？」

という訴えであつた。

私はこの人に漢方の柴胡桂枝乾姜湯(さいこけいしけんきょうとう)という方剤を当て、生命素の相補的医療を行うこととした。この場合も心臓という部分の病変をとらえて何とかしようとしても、何ともなるものではない。癒しの対象はどこまでもこの人の全体でなければならぬ。「陰多くして陽少なし」の生命体そのものを、陽に転換することで病気は治る。単純明快な大自然の理法は嚴然として在るのである。

予期に反せず、一ヶ月後に寄せられた容体報告書によると、大効があつたことが知れた。一週間後には息切れ、動悸がしなくなつたと記してある。このあと、体が温かくなつたこと、軽くなつたこと、食欲や意欲が出たこと、下肢の浮腫が消えたこと、大便がかつてない太いのが、二十センチほどの長いのが出るようになつたことまで記されていた。

瞑眩（好転反応）の欄には、尿量の増加と共に倦怠感が出没したこと、夜間に大量の発汗があつて寝間着を着替えたことが記してあつた。

こうしてちょうど三ヶ月経つたとき、極度に肥大していた心臓が小さくなつたことと、僧帽弁の血液の逆流がなくなつたことを知らせてきた。主治医が「あり得ないことだ」と言つたという。いつたん肥大した心臓は元に戻ることはないというが、それは陰陽の理法に疎い人の言うことだ。陰は遠心力、陽は求心力の働いている状態。故に心肥大や拡張型心筋症は前者、つまり陰病である。心臓という部分の病変ではなく、陽不足の全身病である。だから、生命消長の理法に随つてその不足の陽を補つてやれば、遠心力に因る心肥大に陽の求心力が働いて、心臓は本来の姿に戻るのである。

この稿を書いているとき、この例と同じ心肥大の女性から喜びの電話があった。この方

は大動脈弁の働きが悪いと言われ、一ヶ月後に迫っている手術を、七十歳を過ぎているので何とか避けたいというさし迫った状態を訴えてきた人だつた。

私はこの人にも前例と同じ漢方の方剤を当てて、生命素の相補的医療を行つて万全を期した。電話での朗報は、日ならずして動悸、息切れ、下肢の浮腫などの常の症状が消え、手術の予定が取り消されたというのだ。予約の難しい高名な心臓外科の権威が執刀することになつていたとのことで、当の権威も首を傾げていたことであつた。

担当医から首を傾げられたといえば次のよき事例もある。

それは、夫君五十八歳が職場で倒れて緊急入院したとの奥さんからの電話であつた。ご夫妻は古くからの私の患者さんであつたことから知らせてきたものであつた。

「たつたいま職場から知らせがありまして、これから病院へ行くのですが、いま私がいただいている生命素をのませていいでしようか」と、さし迫つた声であつた。

私はとにかく病院へ、そして夫君のご様子を知らせてくるように。状況によつては生命素が役立つから持つて行くよう言い添えた。

間もなく夫君は心筋梗塞であることが知られた。幸いに小康を得てているということなので、主治医に断つて生命素を与えることができた。心筋梗塞は言つてみれば急なる亡陽なのである。だから補陽が救命・救急の働きを發揮する。その後の経過は逐一、奥さんから電話で知ることができた。

主治医から冠状動脈がボロボロと言われ、レントゲン写真を見せられた。血管がちぎれちぎれになつてゐるのに目を瞠つたという。この病院では手術ができないと言われ、一ヶ月後の二月十二日に転院となつた。この間、生命素は欠かさずのみ続けた。体調が入院前と違つて打つて変わつて良くなり、手術のできる病院へ移つてからは三回の検査があつた。

五月二十八日に至り病院から検査結果の説明があり、奥さんも一緒に聞いた。ここで驚くべきことにすべて異常なしと言わされた。このとき見せられた写真には、前のような血管のちぎれはどこにも見られず、異常なしとの説明に納得できた。

「主治医から、のんで血管がこんなに正常になるものがあるなんて、俺たちはもうメシの食いあげだと言われました。有り難うございました」

との電話であつた。

心臓病で生命素にご縁があつて、手術の予定が取り消され、再生の喜びに浸つた人は多い。そうかといって、どうにもならなかつた事例もある。

ある有名企業の社長さんの来訪を受けた。知人からすすめられてとのことだつた。押し出しは立派だが、脈を診ると散大で力がない。言語も軽微でオーラ（気・靈氣）に乏しい。私は内心、これでは社長職はたいへんだろうと思つた。

こうした虚労から脱け出るには、生命素でないと叶わないのだが、付き添いの重役さん、名刺に管理部長とあつたが、この人がさる有名病院の名を言って、主治医の許可を得てからんのんでいたと聞く。せつかくお出でになつたのだからと体験摄取をすすめても遮さえぎってしまう。のめば即効するのだが、私はこれ以上踏み込めないのでそのままお引き取り願つた。

二～三日して管理部長名のFAXが届いた。主治医にお伺いを立てたがのむなと言われたからうちの社長にはのませられないとあつた。主治医は生命素を知らないのだから当然。それにしても、管理部長は社長のいのちまで管理するものなのか。

沢然としない思いもすっかり忘れた頃、新聞の計報欄にこのときの社長さんの名を見

て、私は思わず息をのんだ。心不全でとあつた。やはり虚労の果てなのだ。まだまだ社会的にも活動できる六十五歳。あのとき生命素の一服を体験摄取していたら即効するから、社長さんも管理部長の言いなりにはならなかつたろうに……。

拡張型心筋症という重い心臓病。心臓の筋肉の収縮力が弱くなり、心臓が拡張する病気。不整脈や胸痛などの症状が現れる。

心肥大がそうであるように、拡張とか膨張とかはすべて遠心力が加わつてゐる状態——陰病である。生命消長の理法からは、ただに心臓という部分の病変ではなく、「陰多くして陽少なし」の体全体の現象としてとらえなければならない。

故に治病に当たつては、不足の陽を補つてやつたらよい。体全体の陽が大きくなれば、部分の心臓にも陽の求心力が働く。陰陽の法則である。心肥大であれ、拡張型心筋症であれ、こうした全人的な癒しでなければならぬのである。

「拡張型心筋症、海外で心臓移植必要、募金協力訴え」という新聞の地域版の記事を時々にする。この原稿を起草していたとき、この病気の三歳の女兒の支援団体が募金への協

力を呼びかけているのを見た。愛くるしい女の子の写真が添えられていた。

白血病でのドナー（血液や骨髓液、臓器などの提供者）を求めていたのと同じく、こうした記事を目にするにつけても、そこはかとなき惻隱の情に駆られ、私は、生命素の補陽の働きを以てすれば何のことはないのではと、密かに思っている。それはただの、「陰多くして陽少なし」の現象なのだから……。

入院直前のSOS（肝炎、肝硬変）

「GOTが一三〇〇、GPTが一五〇〇、即入院と言わされました。これから入院するのですが……」

古くからの患者さんである松本良子さん六十三歳（仮名）が夫君と共に訪れての、セカンド・オピニオン（主治医以外の医師の第二の意見）を求めてのことであつた。

右の検査値は肝細胞が壊されることによつて血液中に多くなる酵素の量を示すものであ

つて、正常値は前者が四〇以下、後者が四五以下である。松本さんの高値はまさしく急性肝炎の発症を示すものである。

この方は普段から健康には人一倍気を遣つてゐる方で、しばしば私のクリニックへお顔を見せていたが、このところ足が遠のいていた。

聞けば身内の方が相次いで入院し、日夜の付き添いで疲労困憊の極きわみにあつたという。それで同じその病院から漢方の投薬を受けていたとのことで、それがここへきて急に食欲不振、脱力感、着色尿などの症状が現れたので検査を受けたところ、右のような結果で即日入院と言われ、驚いて相談に見えたのであつた。

ちょうどこの頃、漢方のある薬方が肝障害を引き起こしたという事例が相次いで報告され、死亡事例が新聞に出たりして波紋が広がつていた。たまたま松本さんが投薬を受けていたのが同じ薬方であつたので、あるいは？ と私も勘織らざるを得なかつた。

およそ、漢方では患者さんの陰陽・虚実に随つて薬方を選ぶ。ずいじょう 隨証治療と言う。このときその人の体力に対して弱目の薬は効果は薄くとも弊害はないが、薬の方が勝つていてと効かないばかりか弊害がある。松本さんは身内の看病で疲れ切つていたというから、その時点でのんでいた薬が勝ち過ぎて、合わなくなつていたものと思われる。

とすると、松本さんはこのとき重大な局面に立たされていたことになる。ありきたりのことでは右に言つた薬禍の一つに數えられることにもなりかねない。こうして私の許に相談に来られたのは幸運であつたと、私は内心そう思った。生命素があるからである。

これまで松本さんは虚実あいかが相半ばして、決して虚弱なタイプではなかつた。むしろ普通以上の体力の持ち主であつた。しかしいまは違う。脈は弱く触れ難く、虚労を思わせる。急ぎ陽を補つてやらねばならない。生命素の出番である。これさえあれば……。すぐにその場でのんでもらい、検査値が正常になるのもそう先のことではないから、安心して入院なさるようにと話した。

なお、主治医の許可を受けること、入院中は冷蔵庫を借りて冷凍の方へ入れて保存すること、必ず名札を付けることなど、こまごまとしたことまで言い添えた。

こうして松本さんはその日のうちに入院した。以下の記述は夫君と奥さんご本人から電話で逐一報告を受けた内容である。

入院直前にただ一回のんだ生命素の効果はその日のうちにきめんに現れた。ひどい脱力感が取れしたこと。食欲がまったくなかつたのがその夜の病院食はおいしく平らげたとのことであつた。

〈表〉 松本さんの肝炎の経過

検査年月日		平成 6 年→					
検査値	検査年月日	8 / 31	9 / 3	9 / 7	9 / 12	9 / 21	9 / 28
		1,300	500	300	197	62	47
GOT	GPT	1,500	700	400	211	90	57
検査年月日		平成 6 年→				平成 7 年→	
検査値	検査年月日	10 / 5	10 / 12	10 / 15	11 / 10	10 / 26	
		30	21	22	退院	16	
GOT	GPT	34	23	23		11	

入院四日目の検査で GOT、GPT が半値になつた。その後の数値は主治医から聞くたびに夫君が手帖に書き留めておいたのを電話で知らせてくれた。上記の表がそれである。この表の九月十二日の時点で主治医から「これまで順調だったが、これからはそうはいかないよ」と言われたという。

一般に、こうした肝炎の検査値は下がつても二〇〇前後でストップしてしまつて、あとはなかなか下がらない。主治医は経験的に一筋縄ではいかないことを言つたのである。

ところが、松本さんはこうした主治医の懸念を裏切つて、このあとも上表の如く順調に推移し、一ヶ月足らずで正常値となつた。このときはご本人からの電話で、「院長さんから一体何をしていたのですかと聞かれました。生命素のこと話してもよろしいでしょうか」とのことであつた。

院長さんは私も会合で一度お目にかかつたことがあつた。テレビにも登場された肝臓病治療でも有名な方である。

松本さんはセカンド・オピニオンを求めて私のもとに来られたといつても、もともと古くからの私の患者さんである。治療の面まで立ち入らざるを得なかつた。そんなこんなで院長さんにはこそばゆい気持ちがあるので、「院長さんには内緒にしてくださいよ」と答えたものだつた。

あとで聞いたことであるが、院長さんからは「教えてくださいよ」としつこく言われて困つたとのことであつた。それほど松本さんの回復振りが劇的であつたということである。とにもかくにも入院したその日から体調が打つて変わつてよくなり、入院はしていくも病人の気分ではなかつたというほどのことであつた。

以上は薬禍によると思われる急性肝炎の一例であるが、生命という全体的な視点からは、病名にとらわれずにどこまでも虚労という「陰多くして陽少なし」の現象をとらえて、その不足の陽を補うことにより治病の目的は達せられるものであることを示すものである。慢性になつたもの、肝硬変になつたものはそれだけ虚労の度合いも深まつてゐるが常であるから、生命素の相補的医療によつて劇的な回生の働きが發揮され、治癒に導かれる。

日本肝臓学会がまとめた最近の「肝がん白書」によると、肝がんによる死者は年間三万人を超え、しかもその約八割はC型肝炎ウイルスによるものという。それだけにC型肝炎にかかるべきかに治療するかが課題となる。

C型肝炎に対して遺伝子組み換え技術によるインターフェロンの投与で約六〇パーセントの人々に効果があるとされている。これでも画期的な有効率という。裏を返せば四〇パーセントの人には無効ということである。それに、副作用が激しいのもこうした薬の宿命である。

一方、漢方による治療も試みられている。ある大学病院で五十例のC型肝炎患者に試みて、うち一例にウイルスの完全消失が見られたという。しかし、検査値が正常になるのに六年ほどかかり、ウイルスの消失にさらに二年を要したという。これでは有効率はきわめて低いし、日時もかかり過ぎる。

現代医学にしても漢方としても、C型肝炎の薬物治療に一爻不足なのである。足りないのは毎度のことながら太陽の大きいなる陽であることは言うまでもない。陽の不足を補うことによって、肝硬変からの劇的な回生の例を次に示そう。

肝硬変の男性（四十五歳）、極めて重篤な状態。在宅療養中に容体が急変、緊急入院したのであつたが数日の命と言われて仰天。たまたま知人に同じ病名の肝硬変で私のクリニックで救われた人がいて、その人の体験談を聞いたと、家人からの電話であつた。その人のんびりいた生命素を分けてもらつたと、奥さんからのみ方の指示を求めてきたのであつた。

入院したときは主治医の言で落胆したが、薬わらをもつかむ気持ちで知人に言われるがままにのませた途端に元気を取り戻し、表情まで変わってきたという息せき切つた声だつた。聞けば石川県の羽咋郡からとのことで当惑したが、ことはすでに進行中なので、主治医の許可を受けること、電話連絡を密にすることをよく言い含めて、のみ量を指示した。

奥さんからは毎日のように夫君の様子をこと細かに知らせてきた。何としても治したいという気迫が感じられた。そういうしていいるうちに検査値のすべてが正常となり、退院したと知らせてきた。緊急入院して一ヵ月足らずであつた。

肝炎、肝硬変、肝がん、病名を付けるとそう呼ばれるが、いずれにしても、末期ともなると肝虚といつて虚労としてとらえられることがほとんどである。故にその陽不足を補う

ことが、癒しの眼目となる。このような癒しはただに肝臓という部分の働きを回復させるのではなく、虚労を治すという全人的な働きの中でそれが実現するのである。ただし肝実（虚労でない肝臓病）の場合は当てはまらないから鑑別が必要である。

無菌室からのSOS

（骨髄異形成症候群、再生不良性貧血、白血病）

「父が死にそうです」

と、娘さんからの電話、お父さんの高森さん六十五歳（仮名）のカルテを見ると、脳卒中の後遺症で漢方の二剤を与えていた。かれこれ二年ほどになるが、このところ服薬が途絶えていた。

聞けば一ヵ月ほど前に四十度の高熱を発して入院、検査の結果「骨髄異形成症候群……再生不良性貧血」と診断されたという。これは血小板や白血球の元となる造血幹細胞が正

常な血球に育たない病気。造血幹細胞が骨髄で造られる段階で遺伝子に異常が起きるためと考えられている。

高森さんは白血球が四〇〇（基準値三五〇〇～九〇〇〇）もないという。高い発熱から当然感染症の合併が考えられる。無菌室に入れられているとのこと。

「骨髄移植しか治療法がないと言われ、父は先生の薬を切らしていたことをえらく悔やんでいます。それで、何とかのませてあげたいのですが……」

と言う。そう言われてもこれまでの漢方の方剤でどうなるものではない。この病気は白血病と共に、極陰性病である。「陰多くして陽少なし」のギリギリの「陽」というべき状態である。生命素の出番、これしかないと。

しばらくして顔見知りの娘さんが見えた。のみ量やのみ方、保存法などをよく言い含め、「主治医の許可をもらつてください。一刻も早くのませてください」

といったあわただしさであつた。こうして高森さんは大自然の陽気を受け入れた。娘さんから知らせてきた白血球数の推移は次の通りである（のみはじめは二月十三日）。

三月五日 七〇〇

三月十五日 二四〇〇

三月二十八日 四〇〇〇 (正常値)

四月十一日 五〇〇〇

高森さんは生命素をのみはじめてから全身状態がめきめきよくなつたとのことで、二ヵ月足らずで退院となつた。ほんとうはのみ量を多くすれば、もつと早くよくなるのだが、瞑眩が強く出てご本人はもちろん、主治医を驚かしてしまう。それではじめから少な目に与えたのであつた。それでも右の如く目を瞑るような回復ぶりであつた。

高森さんと同じような病気に白血病がある。これは骨髄異形形成症候群よりさらに悪性の病気である。骨髄染色体検査で慢性骨髄性白血病と診断された愛子さん二十七歳(仮名)が父親に伴われて私のクリニックを訪れたのは秋たけなわの頃だつた。透きとおるような色白で、いかにも華奢な感じ。ひと目で陰性と知られるタイプだつた。白血病という極陰性病の発病もさもありなんと思われた。

既往症を尋ねると、二十二～二十三歳の頃甲状腺機能亢進症と言っていたが、いまは

機能低下と言われているという。機能の亢進から低下へ。白血病の発症は二十五歳の八月というから、二十三～二十五歳にかけて愛子さんの体が陽から陰へ移行したことが知られる。

白血病は「陰多くして陽少なし」の典型的な虚勞の病なのである。「白い血」とはいみじくもこのことを言い当てる。このような極陰性病に立ち向かうには、何を描いても太陽の大きいなる陽の摂取が急がれる。といつても、間接の形では一爻不足。生命素による直接摂取でないと……。

白血病をはじめ、前例の再生不良性貧血や骨髄異形成症候群、それに先天性免疫不全症候群などは、骨髄移植が必要な病気である。それによつてかなりの高率で治せるようになつた。といつても、それで「陰多くして陽少なし」の体質が変わつたわけではない。移植後の食生活（陰性食過多）が変わらないと再発の心配がある。

それに骨髄移植のドナー（提供者）を探すことは簡単ではない。白血球の型（HLAヒト白血球抗原）が一致しなければならないのである。これは血を分けた血縁者の場合でも四分の一の確率、非血縁者の場合は型が一致するのは数百～数万人に一人という低い確率である。

簡単ではないドナー探しはさて置いて、愛子さんに対する補陽の経過を追つてみよう。
ご本人からの容体報告書と、ご両親からの電話報告による。ご本人の報告書には日々の体調が克明に記されているが、あまりにも冗長になるので要点を抜粋した（原文のまま）。

月	日	全身状態、体調の変化など
10/16	10/15	はじめて生命素をのむ。目が乾いて痒いのと、しょぼしょぼしていたのがすっきりよくなりました。体が楽になり、疲れなかつたです。
	10/13	コンタクトレンズを入れても目がつらくなかったです。眠りが深く、朝もすつき起きられました。
	10/12	悪い夢を見なくなりました。ちょっと無理なことをしても疲れなかつたです。 ぐつすりよく睡れました。

第6章 病の苦からいのちもうけ

11/18	11/17	11/5	11/4	11/3	11/1	10/23	10/21	10/17
体が楽でした。	生命素をいつもより少な目にのみましたが、目が楽になりました。	楽しい夢を見ました。	快便でした。	朝、黒っぽいひだひだの細かい便がたくさん出ました（註：瘀血の排出）。	生命素をのみはじめてからすべて順調です。	疲れもなく順調です。	朝五時に頭が痛くて目が覚めました。熱が三十七度六分。生命素を倍量のんだら四時間後に平熱になりました。	便がたくさん四回ほど出ました。疲れもありませんでした。

11/20

今日病院へ行つて検査の結果が出ました。もう正常値に入つたと聞き、すぐうれしかつたです。ありがとうございました。来年一月十七日に骨髄の検査をすることに決まりました（註＝右の正常になつたという検査は末梢血液の検査であつて母親からもこの検査で正常になつたことの電話があつた）。

容体報告書は以上で来なくなつてしまつた。骨髄検査の結果は？と気にかかりながらも知らせがないまま愛子さんのことは忘れかけていたところ、年が明けて六月になつてから父親から電話があつた。

「お知らせするのがたいへん遅くなり、申し訳ありません。実は一月十七日予定通り骨髄検査がありまして、マイナスと出ました。主治医から完治の状態と言われました。教授からは、このようなことはあり得ないことですと言われました」

と。骨髄移植のドナー探しの登録をしてあつたが、それも要らなくなつて取り消されたこと。それでも半年も経つてから知られてくるとは。聞くのをうつかりしたが、生命素の全人的な癒しからして、甲状腺のほうも当然治つている筈だ。

慢性骨髓性白血病の原因となるがん細胞で働く異常たんぱく質を抑え込んで、がん細胞だけを狙い打ちする抗がん剤が開発されたという。このタイプの白血病はわが国では白血病患者全体の約二割を数えるから、大きな福音という。

こうした情報を聞くたびに私は思う。白血病のような極陰性病は、「亡陽」という根本的命題が病気の背後にあるのだから、このことを是正しない限りこの病気のほんとうの癒しとはならないということを……。こうした難症の治病は科学のもとにあると考えがちだが、そうではない。大自然の生命消長の理法——陰陽の法則のもとにあるのである。

